

P. トンプソン

『労働の性質』

Paul Thompson, *The Nature of Work: An Introduction to Debates on the Labour Process*, London, Macmillan, 1983, xvi+305 pp.

1974年にブレイヴァマンの名著『労働と独占資本』が刊行されて以来、欧米では、この書をめぐって一大論争がまきおこされた。P. Thompsonの著書 *The Nature of Work* は、副題「労働過程論争入門」が示すように、「諸文献の解説と評価」とを通じてこの論争の総括を試みたものである。

3部から成る本書の第1部は論争の「背景」を、第2部は「論争そのものの検討」を、第3部は論争から得られる「理論的、実践的な帰結」を取り扱っている。

第1部は全2章から成っており、第1章「確立された伝統」では、伝統的な産業社会学の諸潮流が検討される。それを整理すれば、1. 新旧の人間関係論と工場社会学、2. 組織社会学、3. 労使関係論となる。著者によれば、第1の潮流は技術を中立的な独立変数と考えた点に、第2の潮流は既存の組織を機能的必然ととらえた点に、第3の潮流は生産・労働以外の分野に問題の解決を求めた点に議論の限界が現われている。その成果を全面的に拒絶するわけではないが、著者の立場はこうした伝統の対極にある。

そこで、第2章「マルクスと労働過程概念」で著者は、論争の原点をなすマルクスの労働過程論の解説と評価とを試みる。

著者によれば、マルクスのいう労働過程は、一般的には物質的・社会的過程として、また特殊的には「資本による労働の包摂」論の観点から分業や機械化の構造的特質を通してとらえられるべきである。だが、その場合も、マルクスによる熟練労働の歴史的解体の過大評価や、工場専制主義というマルクスの概念以上に多様な統制形態の成立する可能性が、歴史的事実に照らして反省されなければならない。また、伝統的なマルクス主義の研究者がこうしたマルクスの労働過程を永く忘却してきた事情も反省されなくてはならない。

第2部「現在の論争」は全5章から成っている。

第3章「ブレイヴァマンと労働過程の再発見」では、ブレイヴァマンの問題提起が概観される。

60年代中頃からの欧米各国の労働運動を直接の背景としたブレイヴァマンの労働過程論研究は、1. テイラ

ー主義の意義、2. 技能低下の歴史的法則、3. 普遍的市場の成立、4. ホワイトカラー労働者の階級的特質を主要テーマとするものであった。その後の論争は主としてテイラー主義と技能低下とをめぐって行なわれたが、著者は、それ以外にも、労働の均質化が労働者の統一を促進するという伝統的マルクス主義の発想や、性・人種にもとづく社会的分業の過小評価がブレイヴァマンにもみられる点を指摘している。

第4章「技能低下：労働の質的低下？」では、技能低下を労働の質的低下ととらえるブレイヴァマンの所説が検討される。

ブレイヴァマンのこの見解は個別実証的にも(A. Zimbalist)、一般理論的にも(Brighton Labour Process Group)支持されている一方で、歴史的立場からは、過去の熟練工を理想化しすぎているとするC. J. Littlerの批判や、熟練解体への労働者の抵抗を技能低下法則への対抗メカニズムとしてとらえるべきだとするA. Friedmanの批判が、また、理論的立場からは、労働市場の構造変化が技能低下と関連しているとするD. LeeやJ. Ruberyの見解、技能の保持は統制権の確保にとって必要条件ではないとするG. MackenzieやT. Elgerの見解が現われている。著者の立場は、こうした批判を原則へのバリエーションとして受け入れ、質的低下の問題とは切り離れたうえで、技能低下を傾向的法則として認めようとするものである。

第5章「統制から抵抗へ」では、テイラー主義こそ真の管理統制の方法だとするブレイヴァマンの所説が検討される。

この点にかんしては、「直接統制」(テイラー主義)から「責任ある自律性」(職務の充実)への歴史的移行(A. Friedman)や、「単純統制」から「技術的統制」(テイラー主義)を経て「官僚制的統制」へと向かう歴史的発展(R. Edwards)を主張する見解が提出されている。これにたいし、著者の立場は、さまざまな統制形態を互いに対立させるのではなく、それらの組み合わせを特殊的情况のなかで理解しようとするところにある。

つぎの2章は論争で看過されてきた問題を扱う。第6章「労働における正当性と合意」では、職場の社会関係に正当性を与える機構が問題とされる。

労働者が自らの職場への適応をゲームととらえ、これへの参加を通じて合意の形成を行なっていると主張するM. Burawoyの見解は、合意形成過程を狭くとらえずに、労働者の適応行動をすべて合意形成的にとらえることにもなりかねない。また、強制から合意への正

当性付与機構の変化が職場闘争の終息をもたらしたとの Burawoy の主張も事実にも照らして正しくない。さらに、職場をとりまく社会事象が合意形成に与える意義を彼が看過した点も問題である。著者によれば、合意と統制は表裏一体の関係にあるのだから、職場機構が両者を成立させていることを確認し、それをとらえる視点を労働過程論に組み入れることが必要なのである。

第7章「もうひとつの分業」で著者は性にもとづく社会的分業が労働過程に与える影響を問題にする。

婦人労働者の社会的不平等は、資本主義と家父長制的家族制度とが相互に利用しあう関係のなかから生まれた性的不平等としてある。著者によれば、性にもとづく差別的階層化をとらえる方法論として、マルクス主義だけでなく、独立した家父長制論も必要なのである。

第3部は第8章だけで構成されているが、この最終章「生産の理論と政治」は、これまでの議論から得られる理論的・実践的帰結を明らかにする。

理論的帰結として、著者は労働過程の現状が体制の違いをこえて類似している事態をとりあげ、その背後に市場原理の有無という根本的相違を探るとともに、資本主義的労働過程の独自性とみられた状況が異なる経済的社会的条件のもとでも生じうることを主張する。実践的帰結としては、階級形成的方法的視角が問題となる。著者は、議論を労働部面から出発させる近年の階級論の試みをふまえ、生産部面からの政治を考えようとしている。著者の展望は、生産の場からより広い「対抗計画」を打ちだしながら、資本への抵抗を社会変革へと結びつける基礎をつくりだすことにある。

以上のような論旨を展開した本書の最大の意義は論争全体を手際よく整理したところにある。形式的にみても、詳細な文献表やその読書案内(以上巻末)から用語解説(巻頭)まで備えたことで、本書は論争への入門書として申し分のないものとなっている。また、内容的にみても、ブレイヴァマンの主張を原則的に受け継ぐ一方で、提出された批判をこの原則へのバリエーションとして取り入れる著者の姿勢は、論争の総括者としてほぼ順当なものといえよう。

だが、整理の巧みさをみせる反面、本書にはいくつかの問題点が存在する。ここでは2点だけ指摘することにする。

第1点は歴史理論にかかわる。著者は現在の性差別の本質を家父長制家族原理をとらえるが、これはブレイヴァマンと対立しているフェミニズムの主張である。しかも、この主張は現在の男女差別の構造の解明を誤った歴

史的概念に求めるものである。すでにマルクスは機械制大工業が家父長制原理の否定を工場法のうちに含むことを指摘し、さらにつぎのように述べた。「男女両性の非常にさまざまな年令層の諸個人から結合労働人員が構成されているということは、この構成の自然発生的な野蛮な資本主義の形態にあってこそ、……退廃や奴隷状態の害毒の源泉である」(『資本論』第1部第13章第9節)。現在の性差別が家族関係に由来するものでなく、社会部面に属す問題であることは、このことを端的に表わしている。

第2点は歴史認識にかかわる。著者が取り組んだ多くの論者は独占段階に固有の労働過程論を模索していた。ブレイヴァマンのテイラー主義論、また、管理形態にかんする A. Friedman の2段階論や R. Edwards の3段階論は、彼らなりの独占段階の認識を背景にした議論であった。著者は、この段階認識を状況認識に読みかえて、対立を調停しようとするが、しかし、それにかかわる段階認識を積極的に示してはいない。

本書が論争の整理には成功したが、論争そのものの止揚あるいは著者が目指す「新たな労働社会学の基礎」を定立することに必ずしも成功していないのは、以上の諸点に起因すると思われる。

とはいえ、本書をもって約10年にわたる論争にも一段落が画されたわけで、今後は個々の実証的、理論的研究のなかでブレイヴァマンの問題提起が生かされてゆくことになるであろう。 [渡辺雅男]